

64 明治十八年（一八八五）における

本邦の初期の細菌学培養について

会 田 恵

明治十八年（一八八五）には我が国の細菌学史上、まことに貴重な記念すべき細菌検査、新しい培養検査が最初に行なわれている。

実は前年十二月に緒方正規がドイツより帰国し、その時にチフス菌の純培養株を持ち帰ったとのことである。それまで顕微鏡検査によって細菌検査が行なわれていたが、ドイツの新しい細菌検査が緒方正規の帰国により東京大学及び内務省衛生局御用係と兼務で衛生局東京試験所細菌室で細菌培養の検査及び研究が始まっている。従って当時はまだ培養に関する用語も統一されておらず、我が国での細菌学はまさに幕開けであり事始めであった。

因みに欧州では周知のようにすでに一八七二年に癩菌

の発見、一八七六年にコッホによる脾脱疽菌の純培養、一八八一年に悪性水腫菌を報告、明治一七年まで癩菌、チフス菌、ブドー球菌、連鎖球菌、緑膿菌、結核菌、馬鼻疽菌、コレラ菌、デフテリー菌、肺炎桿菌、肺炎双球菌と発見され、それぞれ培養に成功している。

また衛生局の職員でドイツ留学から帰朝するとき柴田承桂は明治一七年四月に細菌学研究用の機械器具一式を調達購入して帰朝している。これらにより、明治一八年には次の様な細菌検査が次々と可能になり発表されたのであった。

四月には七日、八日の官報に緒方正規の「脚気病菌発見」についての論文が出ている。日本において最初の新しい培養検査を行なったのであるが、病原菌は追試承認は当然得られなかったのである。当時の反対医学者は海軍の高木兼寛であった。

五月には同じ緒方正規により某邸より依頼の鶏より鶏虎列刺病菌を発見したと膠漿培養基に接種した事などを同月一八日官報に発表している。この時北里博士は衛生局二年目になっているので、この検査に参加していると

考えられる。

七月には徳島・愛媛両県で赤痢大流行し、原因探求のため内務省准判任御用掛医学士北里柴三郎が派遣されており、復命書がでてゐる。培養検査も行なつた結果もでてゐるが、最後を次の様に結んでゐる。

「以上ノ検査ニ因リ考按スルニ彼ノバチルレンハ或ハ赤痢ノ固有毒ナランカ而シテ該菌ノ深層部ニ侵入セサルハ或ハ其ノ性唯腸内面ニ畜殖シテ一種ノ産物ヲ生ジ以テ此ノ如キ病発スルモノナラン然レドモ試験ニ従事スルノ日尚浅ク加フルニ其ノ容易ノ業ニ非サルヲ以テ輕シク之ヲ確定スルコト能ハス自今益々研究ヲ勉メ他日確定不拔ノ報告ヲ開申セント欲ス」(東京医事新誌四〇九号)

八月には矢部辰次郎(海軍々医)により「バクテリア病理一班」(東京医事新誌)三八六号、三八八号)の中で細菌検査について九頁にわたり、顕微鏡検査では「着色検査法」について「耕培法」の章で培養の注意、培壤(培地)の製法などを紹介してゐる。

同八月には岡山県医学学校々長管医学士が東京に滞在し帰県に際し細菌培養関係の装置を一式購入しており、当

時は衛生局試験所の他はまだなかつたとの記事がみられる。(東京医事新誌三八九号)

九月には、長崎にコレラ流行があり北里は長崎に出張しており、培養検査を行ないコンマバチルレンがコレラの病毒と決めてゐる。「長崎県大虎列刺病菌の談」が述べられてゐる(大日本私立衛生会雑誌三一号)

十一月には北里のドイツ留学が許可され十二月五日に出発してゐる。因みに北里の留学は当初三年の期限であつたが、二年延長を自ら願ひ出て計五年となり、その間に氣腫疽菌の嫌氣培養及び破傷風菌の嫌氣培養による分離、及び抗毒素血清完成その他の不滅の業績をあげて明治二五年帰国してゐるが、北里の東大医学部卒業二年目で留学直前の明治十八年は我が国の細菌学史上重要な年であつた。以上は「藤野・日本細菌学史」を参考にして、若干追加し整理したものである。

(柏崎市・会田医院)